

棚田学会通信

第47号 目次

特集 棚田と生きもの (Ⅲ)	1
学会賞受賞記念講演報告	6
日本の棚田百選紹介	8

特集 棚田と生きもの (Ⅲ)



トノサマガエルを襲うシマヘビ：棚田の生き物の賑わいにおける「食べる－食べられる」関係の典型



沢沿いのオニグルミ (左中央) の実はアカネズミ (右) の大好物

(写真提供：大澤 啓志氏)

棚田は、生き物たちにとって大切な生育場所である。棚田のみならず、その周辺環境も含めれば、多くの生態系が成り立っている。私たちが普段気付かない小さな世界がそこには広がっている。棚田を保護するということは、その生態系をも保護することにつながる。今回は「棚田と生きもの」の最終回である。

生き物の賑わいによる棚田の恵み

日本大学生物資源科学部 大澤 啓志

棚田には様々な生き物が暮らしており、彼らの賑わいで溢れている。これは、人間によって築かれた「棚田」という空間に、生き物が侵入し、定着し、繁殖しながら代を重ねてきた結果である。一方で、季節に応じたその賑わいの様相の変化に、私たちは単なる生産の場としての水田を越えた「棚田らしさ」を重ねている。平場の水田に比較して生き物の賑わい（すなわち生物多様性）が棚田で高くなる理由は別に著した（大澤，2014）ので詳細は省くが、棚田域での樹林地、半自然草地、多様な水辺環境の存在が挙げられる。しかしながら、棚田の生き物の全てを我々が認識している訳では必ずしもない。これが自然の未知性、不可知性である。さらに、我々人間は実にいろいろな色眼鏡を通して事物を見ており、棚田の生き物に向ける眼差しも一様ではない。では一体、彼らの賑わいは我々の眼にどのような色（すなわち価値認識）に映っているのだろうか。

直ぐに思い浮かぶのが、①直接的に有用性のある生き物、②害虫・害鳥・害獣、③その有害生物を防ぐ等の間接的に有用性があると認識される生き物、④有用か有害かのいずれでもない「ただの虫」（宇根ら，1989）の類型であろう。また、⑤霊性を帯びた存在としての生き物（精霊、神の使いや化身等）、⑥自然遊び（虫取り、花輪作り等）や愛好家の観察・採取の対象、⑦生活暦・農暦の指標（啓蟄、半夏生ず、豆撒鳥等）といった何らかの意味づけをされた生き物もいる。これに対し、⑧棚田での農作業や保全活動の際に実際に出会う生き物は、後述するようその意義は深い。最後に、直接は見聞きしたことの無い、あるいは認識できない生き物も含め、棚田の生き物全体を総体としてイメージする思考法も、我々は持っている。これは⑨棚田の生態系／生物多様性として自然科学的に理解する場合もあれば、⑩棚田に暮らす個々の生物種の集まり以上の「一つの生命体」として、時には自身もその一部に同一化するホリスティック（Holistic）な見方（アラン・井上，2001）にまで深める場合もある。

過剰な細分は避けるが、例えば上記の①～⑩のように棚田の生き物に対し、重層性を持った眼鏡を我々は掛けている。これが、棚田に暮らす生き物たちの生息・生育空間を維持保全するのみならず、彼らとの関係性の再構築が求められる理由である。つまり、例え目の前に花咲き蝶が舞えども、人間の側

の姿勢や意識次第ではその眼鏡には何も映らないのである。彼らに向ける眼差しや関わり方の内実を、個々人が豊かに成熟させることで得られる喜びや充実感、すなわち棚田の生き物の賑わいによる生態系サービス（ecosystem goods and services）を私は「棚田の恵み」と呼びたい。

幾つか個別に見ていくと、①は直接我々の口に入る、所謂「山の幸」としての生物が直ぐに思い浮かぶだろう。山菜（土坡のフキ、ワラビ、ノビル、石垣のユキノシタ、ゼンマイ、棚田周囲の林縁のタラ、ウド、クワ、アケビ、沢沿いのオニグルミ等）や動物蛋白（田面のイナゴ、タニシ、溜め池のフナ等）、薬用種（センブリ、マムシ等）に代表される在来野生生物である。棚田にやってくる鳥獣も、当然ながら昔から狩猟の対象となってきた。在来種ではないが古い時代に大陸から渡って来て棚田の生態系にすっかり馴染んでいるものもあり、土坡のウメ（梅酢・梅干し）やヒガンバナ（救荒植物）、石垣のチャノキ（自家用の茶葉採取）等である。栽培化の進んだ生物の利用も多く、土坡のカキノキ（栽培品種）、畦畔栽培（ダイズ等）、水田養魚（コイ等）、合鴨の他、水田雑草や土坡等の刈り草を家畜に供することでの間接的な食料生産も含めた複合生業論（安室，2013）より、水田はお米だけを産する場ではないことが明らかにされている。

直接口にしない生物資源材でも、土手や休耕地のススキ、オギ、ヨシ等の茅（萱）の様々な用途に代表されるよう、数多くある。これら植物材料の利用は植生遷移の抑制を伴うものも多く、放棄地が増える今日の棚田域において、地域毎で金銭収入等の経済性を持たせる形での積極的な展開が求められる所以である。例えば、棚田周りの土手等でウルシの樹を育成し、8年サイクルで漆液を得ている漆掻き職人によって、ウルシ林の粗放的な林床管理が継続され草原性の植生が維持される事例（写真1）が報告される（七海ら，2014）。



写真1 棚田の土手沿いのウルシ林(左)と漆掻き(右)耕作余白地に経済樹木を配することで下刈り管理が継続される。

特にこれらの生物資源材 (ecosystem goods に相当する) の利用は、その利用生物を得る過程で自然の中に身を置き、積んできた経験を基に身体全体で作業することで、深い充足感が得られる点 (松井, 1998) も見逃せない。

②の有害生物は人の生産や生活と対立する存在であるが、完全に相手をやっつけてしまうことなく時空間で住み分ける接し方が各地に在る (例えばシシ垣、虫送り)。③は所謂害虫の天敵となる益虫等で、それに加えて④「ただの虫」の発見により食物連鎖を通じた水田生態系の複雑さと、その複雑さが害虫の大発生を抑制していること (ecosystem services における調整機能の一つ) が説得的に示されている。⑤の生き物の霊性については、「八百万の神」や「草木国土悉皆成仏」に代表されるよう、あらゆる生き物、時には無生物にまでも神や仏性 (すなわち心) を見出してきた文化的背景は無視できない。いささか形而上学的ではあるが、生活世界における身近な生き物へ向けられた眼差しにおいて、そのような日本人の精神性こそ環境思想の基層として重要と言えらる (ecosystem services の文化的サービスに相当する)。⑥⑦⑨⑩については紙面の都合から略し、⑧の棚田での作業・活動時に接触する生き物の意義を最後に述べる。本学会員ならば経験あると思われるが、この生き物との触れ合いこそが、今日の棚田をめぐる様々な保全活動の場における原動力となっている場合も多い。



写真2 ニホンカナヘビ(左)は爬虫類、アカハラライモリ(右)は両生類。彼らの出現で好きな人も嫌いな人も大騒ぎとなる。

棚田では様々な生き物に出会える。これは観察会等で探索して見つけ出すのではなく、あくまで受動的な接触のことである。例えば田起こしでのケラやヒバリ、田植え時のカエル (オタマジャクシ) やツバメ、田草取りではクモやカメムシ、畦草刈りではヘビやバッタ、稲刈りの日のカマキリや赤トンボ等である。農暦に応じたそれぞれの種の生活史の場が棚田に重なっている故に彼らはそこにいるのであり、人が農作業や活動で棚田に向かえば出会うのは当然と言えば当然である。しかし、常に出会えるか

と言うと、必ずしもそうではない。季節により、日により、人により、出会いはまちまちで濃淡がある。だからこそ、棚田の生き物との偶発的な邂逅に、その日の作業・活動や棚田の風景とを合わせて深い印象を得るのである。先述のような、棚田の全ての生き物を我々は知ることは出来ない。しかし、その一部であれ出会った時の感情の高まり (例えば写真2) は、その背後にある「棚田の生き物の賑わい」全体へ思いを馳せさせるに十分なのである。ここには「棚田=生き物の賑わいの多い場所」と言う暗黙の了解があるように思えてならない。

では、この暗黙の了解はどのように生成し、何故我々の意識に定着したのだろうか。皮肉な話だが、それだけ今の日本の農村には生き物の賑わいのある場所が残っていないことの裏返しと言えそう。だからこそ棚田での生き物との出会いからその賑わい全体をイメージするといった残された箱舟にまだ宝があることの確認が大事となる。棚田での生き物の出会いは、言ってみればひとり一人のこの確認作業の更新の場なのである。

実際には、出会った生き物と自身との直線的な関係だけでなく、彼ら生き物同士の関係や誰かが築いてきた棚田の景観要素と生き物の関係を、目にしたり想像したりする機会も多い。例えば棚田の生き物たちの間では「食べる一食べられる」関係は日常的なものである (表紙参照)。このような生き物同士の関わり合い (生物間相互作用という) との遭遇は、心ときめく瞬間でもあり、棚田の風景とともに永く記憶に残るものである。また、土坡や石垣、溜め池、水路とその脇の畦畔木等、稲が育つ場となる水田に付随する様々な景観要素を、巧みに利用する彼らの姿を垣間見た際も、「なるほどねえ〜」と首肯するしかない。我々が「宝」と思うのは、実はこのような生き物の賑わいの中に在るしたたかで緻密な関わり合いの世界なのかもしれない。

ここまで来れば、あと少しの小さな事実を知ることによって、棚田の世界はさらに豊かに見え始めるだろう。それは、水田で取れたお米は農家の努力の結晶であるとともに、「食べる一食べられる」関係を通して稲づくりに参加した無数の生き物の命の結晶の輝きでもある (大澤ら, 2015) という認識である。彼らと我らは既に繋がっている。今年も実りの秋が深まりつつある中、改めて「棚田の恵み」を仲間と共に噛みしめようではないか。

【文献】

アラン=ドレングソン・井上有一共編 (2001) ディープ・エコロジー, 昭和堂

- 松井健（1998）マイナー・サブシステムの世界、『民俗の技術』（篠原徹編），朝倉書店，247-268.
- 七海絵里香・大澤啓志・勝野武彦（2014）八溝山地南部における漆掻き林の分布および林床植生の特徵，ランドスケープ研究 77（5），593-598.
- 大澤啓志（2014）棚田と生物多様性、『棚田学入門』（棚田学会編），勁草書房，71-86.
- 大澤啓志（監修）・飯村茂樹（写真）・岡崎務（文）（2015），『田んぼの生き物わくわく探検！』，PHP 研究所
- 宇根豊・日鷹一雅・赤松富仁（1989）減農薬のための田の虫図鑑，農文協
- 安室知（2013）田んぼの不思議，小峰書店

棚田の生きものへのまなざしを育む 「田んぼの生きもの調査」

農村工学研究所 嶺田 拓也

棚田にはたくさんの生きものが生息している。これら多くの生きものたちの息吹を感じる機会を提供してくれるのが「田んぼの生きもの調査」である。ここでは生産者や消費者、地域住民が参加してできる“生きもの調査”について紹介しよう。専門家たちだけでなく、棚田に関わりのあるなしを問わずに行う“生きもの調査”は、田んぼに暮らす多くの動植物たちに気付き、彼らの田んぼでの営みを通じて、棚田でイネを育てることが副次的に多くの生きものたちを養っていることの大切さを感じさせてくれる。棚田でコメをつくり、またそのコメを食べる消費者がそれぞれの立場で、田んぼに集う生きものたちとの関わり合いに気付いてもらうことが重要である。そのためには、カエルやドジョウなどわかりやすい生きものに加え、普段あまり目にしない生きものにも目を向けることで、田んぼが有する豊かな生きものの世界を実感することができる。

例えば田植え後2～3週間後の田んぼでは、ラインセンサスの調査が効果的である。参加者が畦に1列に2～3条おきに並び、片手に金魚網、もう片手には少量の水を入れたシュガーポット（いずれも100円ショップ等で購入可能）を持って、ゆっくりと田んぼに入る。水中に目を凝らしながら、水底、水中、そして水上にうごめく生きものたちを金魚網で掬い取りながらイネの苗を踏まないようにゆっくり条間を進んでいくのである。捕まえた生きものたちは逃がさないようにシュガーポットに入れてフタを閉じておく。このようにして横一列に田んぼの中を進んでいくと、意外と多くの生きものたちに出会うことができる。面積が広い田んぼの場合、畦から

畦まで歩かずに、50～100m程度の適度な距離を設定して田んぼからあがっても良い。生きものにまず気付くことを目的とするので、調査精度は二の次で構わない。採集した生きものはきれいな水を張ったバットにあけて、皆でじっと観察してみる。そうすると、動きの活発なもの、じっと底でうごかないもの、よく目を凝らさないと見えないもの、などたくさんの生きものが田んぼの中に生息していることに気付く。



生産者と消費者がともに参加して行う
「田んぼの生きもの調査」

生きものにちょっと詳しい参加者がいると、早速「これは〇〇ムシだ！」「あれは□□だろう！」などと生きものたちの名前が飛び交うだろう。専門家などのインストラクターも参加している場合、即座に捕らえてきた生きもの名前がでることもあるが、最近では「田んぼの生きもの」に関してわかりやすく手軽な図鑑類も充実してきたので、それらを使って皆で目の前の生きものに名前をつけていくことも、生きものと新たな関係を築いていく上で重要である。なかでも「絵解きで調べる田んぼの生きもの」(向井康夫) 文一総合出版(¥972)、「ポケット版田んぼの生きもの図鑑・動物編」(岩渕成紀) NPO 生物多様性農業支援センター(¥411)がおすすめである。とくに「ポケット版…」では約50種のよく見られる生きものが実物大で紹介されており、目の前の生きものを調べる上で見当をつけやすい。そのように図鑑等で調べているあいだに、バットの中ではヤゴが小さなオタマジャクシを襲ったり、ヒルがタニシにとりついたり、「食う・食われる」世界も垣間見ることができよう。採集した生きものは、すべての名前がわからなくても良い。名付けをしたり、生きものと生きものとの関係に気付くことが、田んぼの生きものへのまなざしを深め、ひいては棚田でコメを作ること、そのコメを食べることの意味をそれぞれ考えるきっかけとなるのだから。

生産者が参加している場合、それぞれの生きものとの関わり合い、そして初めて気付いた生きものた

ちへの今後の付き合い方も聞いてみると良い。「田んぼの生きもの調査」は、生きものへのまなざしを深めるだけでなく、生きものを通じて、生産者と消費者の新たな価値の共有にもつながるツールとなるのである。

棚田に生息する水生昆虫の現状とその保全

中央大学理工学部 西原 昇吾

ゲンゴロウやタガメなどの止水性の水生昆虫は、かつては身近な生き物として知られていた。これらの水生昆虫は、元々は河川の氾濫原や後背湿地などの定期的に攪乱が生ずる環境に生息していたが、そうした環境が開墾されてできた、かつての湿田や掘り上げ、ため池でも、毎年の代掻きや池干しによる定期的な攪乱に適応し、季節とともに各水域を移動しながら生息してきた。



写真1 シャープゲンゴロウモドキ。北方系の大型ゲンゴロウ類で全国的に絶滅のおそれが高く、種の保存法による国内希少野生動物種に指定されている。

しかし、近年の様々な開発、とくに中山間地におけるゴルフ場の開発や宅地造成により、各地の棚田（谷津田）は改変、消失し、高度経済成長期の強力な農薬の大量使用により、水生昆虫は各地で激減した。また、水田農業の近代化に伴う圃場整備により湿田は乾田化され、水路はコンクリートで護岸され、ため池もコンクリートやゴムシートによって護岸され、水生昆虫の生息場所は失われた。近年では、オオクチバスやアメリカザリガニ、ウシガエルなどの侵略的外来種の侵入や、過疎化、高齢化による管理放棄の進展による、休耕田における植生遷移の進行、乾燥化が進行し、水生昆虫の生息状況はさらに悪化した。最近でも、各地で生じているイノシシやシカなどによる獣害のために、耕作しにくい棚田から放棄されてゆくと、棚田の奥にあるため池でも管理放棄が進行し、水生昆虫の生息に適さなくなるため、

深刻な問題となっている。このように、現在の棚田における水生昆虫は全国的に危機的な状況にある。

そうした中で、県境や半島部などの一部の棚田においては、絶滅のおそれのある様々な水生昆虫が最後まで残存してきた。しかし、そうした場所でも、圃場整備、侵略的外来種の侵入、管理放棄が進行したため、水生昆虫の保全が2000年代になり一部で開始されるようになった。

千葉県房総半島の中山間部では湿田の圃場整備による改変のため、下部の8枚の放棄水田を湛水化し、シャープゲンゴロウモドキ（写真1）の保全が2003年より行われてきた。中山間地であり大水による畦畔の崩壊が頻繁に起こるため、保全研究会、地元の守る会、県が協働で畦を補修して水域を維持するとともに、年に数回の草刈りや耕起を行ってきた。また、アメリカザリガニの侵入に対し、侵入早期からのトラップなどによる排除を集中的継続的に進めた結果、4年間で根絶に成功し、以後アメリカザリガニは確認されていないという世界的にも初の事例となった。その他に、付近の放棄水田を湛水化して生息地として再生した。また地元に対しては、2004年より小学校の自然観察会と授業を毎年継続しており、これらの環境教育の結果、地域に保全の意識が浸透するようになった。



写真2 休耕田のわずかな機械のわだちにも、水が深くたまればクロゲンゴロウなどの多くの水生昆虫が生息できる（千葉県）。

棚田で、水田農業とともに水生昆虫の保全をはかることは、水生昆虫が生息できる環境で栽培された安全な米を食べられることから、人間の健康にとっても、本来もっとものぞましいことであろう。棚田地域における、今後の水生昆虫の保全上重要な対策を以下に述べる。中干し期にも掘り上げなどの一部の水域を残す、無農薬や減農薬、農薬の空中散布の中止、夏季湛水や冬季湛水、休耕田や放棄水田の湛水化（写真2）、ため池の数年に1回の水抜き。侵略的外来種が侵入した場合には、早期より駆除を開

始し、低密度管理を行う。そのためにも、地域における棚田の重要性の理解を深めることにより、地域主体の保全を進めることが持続的な水性昆虫の保全には重要である。

こうした工夫や努力が各地で行われることにより、人間と水生昆虫との共存が進展することがのぞまれる。

棚田覚書き—石積の生態学的意義—

九州産業大学工学部 内田 泰三

棚田の担う多面的機能（食糧生産・国土保全・伝統文化継承・景観形成・生態系保全など）への認識と評価は、「日本の棚田百選」を契機に高まってきた。さらに、世界遺産条約や文化財保護法改正をとおして「文化的景観」といった概念が一般化すると、同景観の保全・整備が各地の棚田で広く展開されるようになり、近年ではこうした取り組みの結果として、上記多面的機能への認識と評価が一層高まっている。

ここでは棚田の多面的機能、中でも石積棚田の生態学的意義について、石積壁面をハビタットとして利用する植物たちに着目して述べてみたい。

石積壁面に成立する植生について特筆すべき点は大半が在来種からなっていることである。これは光や土壌養分など決して良好とは言えない諸条件が外来種の定着を阻んでいるのであろう。上記在来種の多くは概して、キク科ならびにイネ科をはじめとする風あるいは重力散布によるもので占められるが、生活型についてみると一年生草本類から多年生草本類（シダ類を含む）まで、さらには常緑性ならびに落葉性の木本類まで多様である。棚田を取巻く水路のり面、畑地、草地および造成地など周辺環境にはみられない種が石積壁面に出現することも少なくなく、石積壁面は地域にプールされた在来種のハビタットとして重要な役割を担っているものと期待される。

一方、上記した石積壁面の植生は、年数回の除草によって管理されるなど、人と自然との間に生じる微妙なバランスの上に成立している。実際、放棄された棚田で種数や多様度は大きく低下する。すなわち、石積壁面が在来種のハビタットとして、ひいては地域の生物多様性保全の一助としてその役割を発揮していくには、棚田と人々との関わりを存続させていくことが何よりも重要なのである。換言すれば、人々の生業とともに維持されている棚田にこそ生態学的意義が見出され、また、多面的機能が兼ね備えられていると考える。



石積壁面に成立する植生（東峰村竹の棚田）

学会賞受賞記念講演報告

うきは市役所うきはブランド推進課

熊懷 真孝

この度は、石井進記念棚田学会賞という荣誉ある賞をいただきまして誠にありがとうございます。会長をはじめ、役員・関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今回の賞の対象となりました団体は「つづら棚田保全協議会」「つづら棚田を守る会」「うきは夢酔塾」の3団体になります。

うきは市は福岡県の南東部にございます。その中でもつづら棚田がある新川地区はさらに南東部にあり、約400年前室町期より手作業で造られてきた棚田であり、約6ha、300枚大小の棚田で構成されています。平成11年には日本棚田百選に認定されました。

つづら棚田保全協議会は、住民5戸10人（出身者含む）で組織され、平成10年より棚田オーナー制度を開始しました。毎年約100組のオーナーの登録をいただいております。都市との交流を活発に行っています。つづら棚田を守る会は、平成17年につづら区の1件の農家に後継者がいないことから相談があり、地区内の方々と協議を重ね、「地区内のできるもので耕作しよう」と組織されました。会員は40名程度、各自の田畑を営農しながら年間160日程度をかけて約1.1ha（70枚）の棚田を耕作することで、棚田の景観を保つ活動を行っております。また営農だけでなく、九州北部豪雨災害等で流出した彼岸花の植栽や各集落へ水仙を植える活動、さらには棚田でお月見会の開催や一度廃れてしまった鬼火焚きの復活をし、営農することで景観を守る活動だけでなく、生活の中の景観・文化を守る活動を行っています。

うきは夢酔塾は、当初旧浮羽町が呼びかけて、地域おこしに興味がある方が集まる場を計画し、その一年後に「うきは夢酔塾」として、本格的に活動を開始しました。当初、地域資源を掘り起こす活動を行っていたところ、つづら棚田の彼岸花が綺麗だ、ということになり、彼岸花めぐり&ばさら祭として毎年開催される祭りとなりました。ピーク時には3万人以上の来場者がある一大イベントへと成長しています。

これら3団体による、それぞれの取り組みを通して、この地域そして棚田の風景が守られており、それによってお客様や応援者が何度も訪れてくれる地域へとこれからも力を合わせて地域作りに努めていきたいと思えます。

鴨川現代バレエ団
長村 順子

2014年「里舞」東京公演。この公演は、鴨川現代バレエ団の団員と新国立バレエ団等のプロのダンサーを客演に招いての初めての大都市での「里舞」上演でした。

棚田と棚田を取り巻く自然環境、そこに暮す人たちの姿を舞踊作品にした、里の世界の叙事詩。自然を踊るダンサーたちは、自然のエネルギーの象徴として、長い黒髪を束ね、靡かせて踊る。オープニングは、舞台上の大きなスクリーン上に大山千枚田の四季を撮った写真のスライドショーが音楽と共に繰り広げられる。風土が生んだ新しいバレエ「里舞」を地方のアマチュアたちの力で、発信し、棚田の世界観をアピールするために、NPO法人を設立しての挑戦でした。

2002年、「全国棚田千枚田サミット」が鴨川市の大山千枚田で開催。その折に姫神の「神々のうた」という曲にのせて創作発表した「ルーツ」というダンスが「里舞」の始まりです。その後10年にわたり多数の作品を発表し続けてきました。

その間、私たちの地域でも棚田を取り巻く環境は依然厳しく、保存会を中心に耕作放棄される田んぼを何とか食い止めようと、都市住民との交流をすすめながら奮闘しています。バレエ団も幼い頃から田んぼで踊ってきた生徒たちが10年を経て表現力を持ったダンサーに育ち、自分たちが拠って立つ大地を足の裏にとくと感じ「里舞」をより進化させながら、棚田を象徴とした日本の里の文化と美に目を向け、踊りを通して発信していくことで、戴いた棚田学会賞に応えていきたいと思えます。

この度の棚田学会賞を戴きましたことは、誠に有難いことです。有難うございました。支えてくださっ

た皆様にも深く感謝申し上げます。

いこま棚田クラブ
出口 育宏

栄誉ある棚田学会賞を頂き有難うございます。

受賞業績にありますように全国に数多くある棚田が高齢化や過疎に伴う耕作放棄に悩み、色々な知恵を絞ってお米作りに挑戦されております。そんな中であって棚田の生産力増強ではなく棚田の景観整備、自然環境教育をめざして農事体験や休耕田の草刈りを続け、その後に草花を植え景観をめぐる活動にいろんな世代の都市住民が多く訪れる環境づくり、そしてその環境を維持するために集まるボランティア。何故、こんなに多くのボランティアが手弁当、交通費自前で毎週、毎週12年の長きにわたって集まってくるのか？その実績が評価されました。私たちの活動拠点は奈良県生駒市にある生駒山中腹（標高300m～400m）にある1/2は休耕棚田になった所です。ここは奈良時代から街道が通っていたといわれる暗越え奈良街道に面し歴史的由緒のあるところです。

20世帯80名の小規模な集落では棚田での生産性は望めないと放置された休耕棚田を整備して景観整備（生物多様性の保全）と未来を担う子どもたちの体験活動に焦点を絞って活動を始めました。地域の自治会との協働活動も稀有な活動の一つです。棚田はシーズンを通じて幼稚園児、小学校の遠足、各地の小学生団体とその保護者、大学生の棚田実習とイベントがいっぱいです。それを支えるボランティアは毎週の活動日には30数名を越え年間延べ参加者は1600名を数えます。参加者の居住地は棚田のある生駒市だけではなく大阪、奈良近郊の15市町村に及びます。この原点は大阪市にあるNPO法人シニア自然大学校で1年間自然環境教育を学び修了後は、生涯活動の場として「いこま棚田クラブ」にやって来た人たちです。



近畿大学生と子ども（脱穀）

日本の棚田百選紹介

島根県奥出雲町『大原新田』

奥出雲町教育委員会 高尾 昭浩

奥出雲町は島根県の東南端に位置し、鳥取県と広島県境に接する中国脊梁山地の北麓に広がる山がちの町です。この地は今日もなお古代製鉄法の“たたら製鉄”の炎が世界で唯一あがる町として全国に周知され、その技術は国選定保存技術に選定されています。また、古事記に登場するスサノオのヤマタノオロチ退治神話の舞台として知られ、出雲神話発祥の地ともいわれています。このことから奥出雲町は「神話とたたら製鉄の町」として情報発信し、まちづくりを推進しています。

歴史を紐解きますと、天平5年(733)に記された出雲国風土記の仁多郡の条には、「諸郷より出すところの鉄堅くして尤も雑の具を造るに堪ふ」と記載されています。このことから、既にこの頃には奥出雲町で盛んにたたら製鉄が行われ、生産される鉄の優秀性が知られていました。その後、近世から近代初頭にかけて我が国の一大生産地帯として隆盛を極めたのです。これは自然環境に恵まれたことが大きく、奥出雲の大地が深層風化の進んだ花崗岩地帯で、たたら製鉄に必要な良質の砂鉄を採取しやすく薪炭林となる山々の豊富な山林資源にも恵まれていたからです。このことから砂鉄採取は、山を大規模に切り崩し水流によって比重選鉱する「鉄穴流し(かんながし)」という独特な手法で、数百年間にわたって全町的に営々と稼業されました。このため奥出雲の大地は想像を絶する面積の山々が切り崩されました。しかし、先人たちは自然の恵みである砂鉄を採取した跡地を荒廃させることなく豊潤な棚田に拓き、農業基盤として復元していきました。このため、奥出雲町の広大な水田は、たたら製鉄によってもたらされたといっても過言ではありません。

さて、日本の棚田百選に選ばれている「大原新田」は、たたら製鉄の経営者であった糸原家が江戸時代末の文久2年(1862)に開発した棚田として知られています。かつてこの地で糸原家のたたら製鉄の工場(大原鉦)が所在していた場所とその周辺を、既述の鉄穴流しの技術を活用して拓いたもので、総面積4.9ha、38枚の棚田を数える良田をつくりあげました。このため、古い地図には、「大原鉦」や「鉄穴」などという、たたら製鉄や鉄穴流しに関わる地名を今日に残しています。また、一般的に棚田といえば数アール程の小規模で、しかも不整形な水田が丘陵斜面に展開している

イメージを持ちますが、大原新田は水田一枚あたりの面積が10a以上あり、あたかも近代的な圃場整備を行ったものと見間違えるほどの大区画で、しかも整然とした棚田であることが特徴です。さらに、灌漑用水は山一つ隔てた水系から導いており、数kmにわたり山中を這うように導水し、ため池をも設けるなどしています。実は、ここにも鉄穴流しの技術が生かされており、土木技術の高さを窺い知ることができます。

このように、たたら製鉄を背景とする棚田や水路などが明瞭に今に息づく独特な景観であることから、大原新田を含む周辺エリアが、平成26年3月に「奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観」の名称で中国地方初となる国の重要文化的景観に選定され注目を集めています。

世界的に見ると、鉱山跡地は採掘が終わると打ち捨てられ、荒廃するのが一般的です。しかし、たたら製鉄とともに生きた先人たちは、砂鉄を採取した鉄穴流しの跡地を豊潤な稲田に再生し、広大な農業基盤を形成していきました。この歴史は、今日に至って、西の横綱「仁多米」と称される産地となり、奥出雲町で産するコシヒカリは、全国米・食味鑑定コンクールにおいて5年連続で金賞を受賞するなど、ブランド米として全国に流通し高い評価を得ています。特に大原新田をはじめとする馬木地区の棚田で育まれた良質米は、特においしいお米として知られ、生産者も誇りと自信を持って耕作を続け維持管理しています。



大原新田

【編集後記】

「棚田と生きもの」から、また新たな棚田の一面が見えたようである。

棚田学会通信 第47号 2015年11月30日発行
発行/棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com